

巻頭言

日本文学会五〇周年を迎えて

二〇〇四年度日本文学会会長 瀧本和成

立命館大学日本文学会が創立五〇周年を迎えました。本会は卒業生、大学院生、学部生及び日本文学専攻の教員を中心に組織され、春の大会、国語教育ゼミナール、談話会など日本文学の研究発表、教育実践の報告を中心に活動をしてきました。また、学生部会が組織する各時代（ジャンル）による研究会、秋の日本文学旅行の交流も継続して行ってきました。それらの活動を通して学部生、大学院生、さらに卒業生との交流を広げ深めてまいりました。現在では学部生や大学院生たちは、大会や研究会に参加することによって先輩たちの研究発表・論文及び国語教育実践を聴き、刺戟を受け、さらに文学・語学研究、国語教育への情熱が高まるという好循環を形成しています。その結果、研究職や国語科教員になる人材が輩出していったことは大きな成果だと言えます。また、機関紙である『論究日本文学』の発刊によって大会研究会等に出られない会員の皆様にも論文を通して刺戟を与え、勤務先の教育・研究機関などで生かされ、役立って行っただと思われまふ。それらは単に立命館大学の卒業生、大学院生、学部生の世

界に留まらず、広く日本文学研究全体に高い水準の研究論文・実践報告を提供出来たと自負しております。現に研究論文を単行本に纏められたり、学位を授与されるなど、その研究分野において第一人者として認められ、活躍している会員の方々も少なくありません。近年では若手の研究者育成にも力を入れ、発表・執筆の機会を広げた結果、論文博士だけでなく、課程博士も多く輩出しています。立命館大学日本文学会が単に大学同窓の交流だけでなく、常に学際的な側面を大事にしてきたことはこのことから明らかです。日本文学会の特質は、会員の方々の研究と教育実践の相互理解を果たしてきたことにあると言えます。一人一人の文学研究への情熱がやがて輪を形成し、影響を及ぼし合う形を身をもって体験できる場として成立してきたと考えます。まさに一人一人の真摯な研究態度が良質な研究を生み出してきた学会だと言えます。

最近では日本国内だけでなく、アジア、アメリカ、ヨーロッパなどの留学生たちが本会で発表し、論文を執筆する機会も増えてま

いりました。五〇周年を記念して開かれた昨年の記念大会でのシンポジウムは、世界の中の日本文学研究の現状と問題点、これからの発展について考察し、議論する絶好の場となりました。それは日本文学が国内のみならず全世界でどのように読まれ受容され評価されているかを改めて知る機会となりました。動もすれば私たちの研究が個人の閉じられた空間に陥っていく弊害を批判摂取し、日本文学（研究）を相対化する視点の重要性を教えてくださいと思います。

抑々研究とは何か、これからの日本文学（研究）はどうあるべきか、その意味、価値を一人一人が真剣に考え、目的意識を持つことがいかに大切かということを再認識する契機となりました。国際化が叫ばれる今日大事なことは日本文学（研究）を多様な視点で俯瞰する態度であり、それは今後ますます求められて行くことでしょう。それと共に一方で肝要なのは朴訥に只管に内に向かうということ、そしてより深く掘り下げていくという態度であると考えます。それらがバランスよく研究する者の中に備わった時、日本文学（研究）はとても豊饒な内実を獲得することになると考えます。

立命館大学日本文学会は五〇年に互りまさに様々な視点、多様な研究の在り処を求めて活動してきました。この五〇年間を振り返ることは、現代の日本が置かれている状況、その縮図であるような日本文学研究の実状を把握し、展望することになると考えます。そのような成果を私達の先輩方は収めてきたと改めて実感し、

敬服する次第です。これらの歴史、そこから積み重ねられた蓄積を鑑みることは、そういう意味でも大切なことのように思います。私達の未来、日本文学研究の将来は決して楽観的なものではありませんが、日本文学の魅力と研究意義を再発見するその契機はまさに日本文学会五〇年の軌跡をしつかりと見詰めることにありと確信しています。ここに日本文学会五〇周年を記念し、その足跡をしつかりと踏まえ、今後の学会の方向性や二一世紀の日本文学（研究）への指針となることを強く希望いたします。

（たきもと・かずなり 本学教授）